

卒業論文の要旨

論文題目	萩原朔太郎「猫町」——幻燈の町の正体——
氏名	佐藤 凜
メジャー	文学
(要旨) 口語自由詩の地平を拓き、後に「日本近代詩の父」とも称された詩人である萩原朔太郎の作品の一つに「猫町」がある。昭和 10 年(1935 年)に発表された本作は朔太郎の作品にしては珍しく〈小説〉という形式によって書かれている。本論文はこの「猫町」が〈小説〉で書かれたことによる創作上の意義を見出すとともに、作中で〈私〉が迷い込むことになった幻燈のような町(猫町)の正体を朔太郎の個人史に照らし合わせて明らかにすることを目的としている。 朔太郎の創作は常に〈詩〉によって支えられてきた。それは〈詩〉が最も主観的な文学であるという朔太郎の持論によるものである。しかし、「猫町」が書かれた当時は「新散文詩運動」の展開や『氷島』の発表による明確な「退却」の経験など、朔太郎を〈詩〉から散文へ転換させ得る動機が複数見受けられる。従って、本論文では「猫町」発表と同時期の複数の詩論やエッセイを読み解くことで当時の朔太郎が構築していた〈詩〉と〈小説≒散文〉の関係性を明確にし、「猫町」が小説で書かれた理由を解き明かすこととした。また、詩論集『詩の原理』の中に記述される「現在してない」ことこそが「詩的」であることの一要因であるという文章に着目し、「猫町」に描かれる世界が「散文詩風」である所以について朔太郎の実生活の中で叶えられなかった物事との関連性を模索した。 一方で、本論文においては当時の詩壇の潮流や朔太郎の交友関係および特に小説を主とする他作品からの影響といった外部的要因に対する考察は不足しているため、この点に関しては今後の研究が期待されるものである。	
(指導教員の推薦のコメント) 日本近代詩の巨人である萩原朔太郎に、「猫町—散文詩風な小説」がある。詩人としての人生を切り拓いてきた朔太郎が、どうしてこの〈散文詩風な小説〉に取り組むことを考え、何を表現したのだろう。その謎とも言える詩人の秘密を、意欲的に解き明かそうとした論考である。近代詩の最前線に立って詩を問い続けた朔太郎の精神に迫っている。	